

議事堂が全く見すばらしく見えるようになったのは、すぐ近くに38階の三井霞ヶ関ビルが建てたからである。38階にある展望台から見ると、議事堂が何と小さく見えることか。緩やかな坂の上につくった議事堂は、その坂の下の方から仰いでこそ立派な景観なのに、正に見下して見るようになったのである。

その38階のビルも、その後たくさんできてきた超高層ビルの存在のために、もう人々の口にあまりのらなくなってしまった。現在、最も活発に高層化が進められているのは新宿で、50階前後の建物が一つは完成し、あと三つが大体の姿を現わしている。四つの超高層ビルができてみると、それまで最高を誇っていた47階の京王プラザホテルがたいして高く見えなくなってくるから不思議である。

そういえば、かつてニューヨークを旅行した時、東京タワーより100メートルも高い102階（380m、テレビ塔を含めると441m）ものエンパイアステートビルがそれほど高く見えなかったことを思い出す。まわりに数十階のビルがいくつもあるので、それほど感じなかったのである。しかし、もし現在、102階のエンパイアステートビルを東京の真中に建てたら、人々はどのような印象を受けるだろうか。

窓外に展開するスカイラインは、日ごとに形を変えて行くようである。だがそれにしても、まだ1・2階の家の何と多いことか。世界の巨大都市で、都心からそれほど離れていない所にこれだけの小住宅を密集させている所は他にない。まことに日本的な景観を毎日満喫しつつ、移りゆく景観を眺めている。

地 域 社 会

内 藤 博 夫

郷土であり、居住地でもある八王子市は今や人口28万人、近年急激に都市化されつつある地域である。自宅の周辺をみても、背後にある高台を越えて、桑の実を盗み取りしながら、小学校へ通った頃の畑作景観は見ることができなくなった。都市計画道路が走り、区画整理が進み、新しい住宅が次々と建てられている。工業団地は小学校と目と鼻の先に建てられてしまった。たしかに生活は便利になったが何かさびしい気持ちに襲われる。

一般に都会人は地域社会とのつながりが薄いといわれている。ベッドタウン住民の地元帰属意識の低さは社会学者がよく取上げる現象である。都市化の進む八王子市民の場合はどうであろうか。

八王子は甲州街道の宿場として発達した歴史の古い街である。野沢秀樹氏は八王子を歴史的都市と呼んで論文を書いておられる(人文地理19-4)。急激な人口増加にもかかわらず地域に根を下ろした人々の力は無視できない。昭和30年頃を境にして新旧をわけてみると旧住民と新住民の混在は首都圏の他の都市と同じく八王子市でも顕著な現象である。革新都政のもとで、中央線沿線では革新首長化が東隣りの日野市にまで及んできた状況の中で、八王子市は依然として保守の城を守っている。旧住民の保守的性格の反映かと考えてみたこともある。それはともかくとして私自身は旧住民の1人であるが日常生活では地域社会に対してひどく疎遠な存在になっていることに気づく。地域社会から浮上りようになったのは電車通学をはじめた高校時代以来のことである。それでもまだ当時は近隣の方々との交際は多少あった。大学に入学してからは現在とそれほど変わらない生活様式、つまり昼間は東京で過す生活に入ってしまった。ときたま市内の冠婚葬祭に招かれたときなどに郷土意識がよみがえってくるのである。

旧住民でありながら東京へ通勤・通学する人間は増えており、これらの人々の意識から郷土が薄れつつあることは事実であろう。しかし他方では歴史的産物としての郷土文化を掘り起し、市民の共有財産にしようとする人々がいることも事実である。ここに多摩文化という不定期の雑誌がある。市内に事務局をもつ多摩文化研究会の機関誌である。これまでに23号出されており、昭和40年12月発行の16・17合併号は地理特集号にあてられていた。三多摩の文化を対象とする雑誌であるが実際は八王子の歴史が中心テーマとなっている。研究会の構成員は実業家、自営業者、教員、医師、一般サラリーマンなどさまざまな階層を含み、右から左まで傾向を異にする人が加わっている。新旧住民の区別もなく、郷土文化、地域の文化に愛着と関心をもっていることで一致できる人々が集まっているわけである。地理学を志す者であればこのような雑誌に関心を寄せるのは当然であろう。私も卒論作成当時にこの会に入会したのであるが生活様式のなせるわざか会の活動に積極的に加わったことはなく、1購読会員にとどまってきた。史料的なものが多いためもあって丹念に読んだことはあまりない。にもかかわらずこのような地道な文化活動は、それに参加している人々の動機が何であれ、大変貴重なものと思う。郷土文化の発掘と保存は住民に郷土に対する誇りと愛着を育てることに役立つからである。長距離通勤が一般化しつつある現代社会にあっても、少くとも精神面においてだけでも郷土や居住地に対する愛着をもちつづけたいものである。